

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	栗原 悠
論文題目	島崎藤村研究——一九二〇年代を中心に——
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、近代の代表作家の一人である島崎藤村の文学的営為とそのテキストを、新たな視点から読み解くことを試みたものである。</p> <p>島崎藤村(1872-1943)は、明治から昭和の戦時下にいたる長い期間にわたって営々と活動を続けたが、これまでの藤村研究の大きな関心は、詩人としての出発期や小説『破戒』(1906)などに端を発する自然主義の時代、そして晩年の大作『夜明け前』(1929-1935)を中心とする1930年代に向けられてきた。そのなかにあつて、1920年代は藤村における間(はざま)の季節、ないし『夜明け前』を控えた一種の停滞期とみなされ、十分な考察がおこなわれてきたとは言い難い。本論文の大きな特色と意義は、この1920年代に着目し、この時期における藤村の社会への多角的な関心を、同時代の文化的・社会的背景との関わりを通して浮き上がらせるとともに、この時期に書かれた「ある女の生涯」「嵐」「分配」など、大作とはいえない小説群を新たな角度から読み解き、再評価を加えた点にある。論文は三部構成で全九章、および序章、終章、参考文献一覧、初出一覧から成るが、以下に各章の概要と達成点を示す。</p> <p>第一部「模範としての日本詩人・松尾芭蕉の再評価」においては、津田左右吉らの同時代の松尾芭蕉評価を藤村がどのように摂取し、それが後の創作にどう関わったかを論じた。第一章「藤村における子供のモチーフ——津田左右吉の松尾芭蕉・小林一茶評価との比較を視座として——」では、当時の藤村が津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(1916-21)の摂取を通して、津田の文学史観を受容していた可能性が高いことをはじめて指摘し、これまで藤村自身の境遇などと結びつけられ、個人的・私的なものとみなされてきた藤村の芭蕉評価を、社会的な視座と国民国家論的な文脈から検討する必要性を論じている点の新しい。そして第二章「一九二〇年代における松尾芭蕉受容——太田水穂主宰『潮音』との交渉から——」では、詩人太田水穂が主催する短歌雑誌『潮音』において展開していた松尾芭蕉論、また同誌上における芭蕉研究会の活動に注目し、その水穂らの俳諧論、芭蕉論によって、藤村が自らの芭蕉理解を深め、また更新していったことを具体的に明らかにするとともに、こうした芭蕉理解が同時代の創作の理論的根拠にもなったことを指摘している。</p> <p>続く第二部「小説テキストと社会思想の交差」では、一九二〇年代に発表された「涙」(1920)、「ある女の生涯」(1921)、「三人」(1924)、「嵐」(1926)、「分配」(1927)という五つの小説を対象として読解し、その試みが当時の藤村の社会意識とどのようにかかわり合っていたかを、具体的に論じている。まず第三章「「涙」とその問題系——掲載誌『解放』の論調との交差——」では、従来ほとんど言及されることのなかった小説「涙」を発掘して、この小説が掲載誌『解放』における私有財産や一夫一婦制への批判的な論調を取り込むなど、同時代の思想的背景を明らかにしている点が注目される。第四章「「ある女の生涯」における信仰——森田正馬の〈患者〉認識との比較を中心に——」では、藤村自身の長姉をモデルとしたこの作品の舞台となった病院の院長、森田正馬の「森田療法」と称される医学療法や学説を参照し、また森田の天理教や大本教などの新興宗教に対する議論を踏まえて、のちの『夜明け前』に顕在化する平田国学への視点を見出し、それを具体的な読解によって明らかにしている点に新しさが認められる。次いで第五章「「三人」に見る知識階級の女性への視座——学都・松本と女子教育——」では、のちに結婚する加藤静子がモデルの一人ともなっているが、この小説の主人公が松本の女性教員として設定されていることに注目し、一九一〇年代から二〇年代前後の長野においては生徒らの個性を尊重する自由主義の教育が盛んであり、松本がその中心地であったこと、しかしそれは既存の国家道徳観と反目する側面を有していたことを確認するとともに、ジェンダーの問題をも視野に入れて、同テキストが同時代の社会思想への批評的性格を有していることや、中央-東京の男性中心の文壇の関心には入</p>	

氏名 栗原 悠

りにくい、地方—女性知識階級の問題を描出し得た小説として再評価することを試みている。さらに、第六章「『嵐』における〈ユーモア〉の志向とその帰趨——松尾芭蕉評価を補助線として——」は、藤村自身の身近に取材し、日本の伝統的な芸術の流れを汲む「心境小説」として読まれてきたこの小説を、「ユーモア」の体現者としての芭蕉像、および作中の「私」の造型に目を向けることで、「私小説」と「本格小説」との関わり、あるいはその背後にある日本・東洋と西洋、ナショナリズムとコスモポリタニズムとの危うい均衡を読み解こうとした意欲的な論文である。そして第七章「『分配』における経世済民の思想——早川三代治とヴィルフред・パレートの経済学を視座として——」では、印税の分配という題材を通して、経済学者早川三代治とその思想の背景にあるヴィルフред・パレートの経済理論を補助線に、自由競争的な経済原理を許容しつつも、これに対する共産主義・社会主義的な問題意識にも理解を示す藤村の二面性を浮き彫りにしている。

最後の第三部「転回としての紀行、詩集」においては、ここまでの各章でとりあげた小説群に続いて、『夜明け前』の準備に取り組んでいくことになる一九二〇年代後半に試みられた二つの異なるジャンルに焦点をあてている。第八章「『山陰土産』における〈素人〉の企図——方法としての旅行記——」では、交通網の充実などにより、レジャーとしての旅行が身近になった時代に、藤村が企てた「旅行記」としての方法と、作中で繰り返し言及される出雲神話を通して、このテキストが有しているナショナリズムの問題にも照明をあてている。掉尾の第九章「岩波文庫『藤村詩抄』における編集の意味——詩人としての自己イメージ形成——」では、岩波文庫版『藤村詩抄』がどのような編集意識のもとに、複雑な編集過程を経て成立したかを詳しく追尋するとともに、それによって藤村が自らの詩人としての営みとイメージを再編成していく経緯を詳しく辿っている。

公開審査では、こうした点が高く評価されるとともに、この時期の藤村の「公」と「私」両面にわたる問題性を多角的に浮き彫りにしようとするあまり、一つの論点が深められずに拡散し、各論文の結論が必ずしも明確ではないこと、藤村の社会意識を中心に論じた第一部と、小説テキストの分析を中心とした第二部との問題意識が緊密に結びついていないこと、一九二〇年代を中心に挙げた結果として、藤村の主要な小説を論じられなかったことなどの問題点が指摘された。また、大正デモクラシー以後の時代背景やメディア・出版の具体的状況にさらに目を向ける必要性が指摘されたほか、一九二〇年代という時代区分が、大正期から昭和期を問い直す視点として近年提唱されている「第一次世界大戦以後」「戦間期」といった理解に比してどれだけの有効性を主張し得るか、あらためて検証する必要があるということも、本論の枠組みに関わる大きな問題として指摘された。しかし、これらは本論文の欠点というよりも、今後著書としてより効果的に成果を提示するために検討が求められる課題というべきものであり、むしろこれらの課題を踏まえて、『夜明け前』を初めとする藤村の小説テキストの本格的な分析など、今後の研究をさらに発展させていくことが期待される。

以上のように、本論文は、藤村における一九二〇年代を新たに意味づけ、作家論的な位置づけにおいても、小説テキストの読解においても、藤村研究および日本近代文学研究に確実に新しい視点をつけ加えるとともに、今後の研究の進展に寄与するものであると判断される。従って審査委員会は、全員一致で、本論文が「博士(文学)」の学位授与に値するものと認定する。

公開審査会開催日	2020年 12月21日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宗像 和重	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 敏夫	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽 耕史	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学名誉教授	中島 国彦	日本近現代文学	博士(早稲田大学)
審査委員	徳島文理大学文学部・教授	中山 弘明	日本近現代文学	博士(早稲田大学)